

元気が出るピアノ、クセになるピアノ！

上原ひろみ

2003年の世界デビュー以来、世界中でその類稀なる才能を認められているピアニストの上原ひろみ。この1月に、17歳の時に初共演して絶賛されたチック・コリアとのブルーノート東京での共演作『デュエット』を発売したのも束の間、このインタビューの翌週4月30日(水)にはそのチックとの日本武道館コンサートという大プロジェクトを控える中、5月28日にリリースされる1年3ヶ月ぶりとなる待望の新作『ビヨンド・スタンダード』のことなど、大人気女性ピアニストの魅力に迫った！

(2008年4月24日(木)「ヤマハミュージックアーティスト」にて)

取材 & 文：加瀬正之



写真提供：ユニバーサルミュージック株式会社

● 来週に迫った日本武道館コンサートを控え、現在の心境はともかく、今そこに向けて練習していると言うよりは、毎日の積み重ねなので、逆に言うとも更ジタバタしてしまうのではないのか(笑)。ずっと前から決まっていたことだったので、これまでコツコツ貯めてきたものが出せればよいと思っています。

● 日本武道館でコンサートを行うということに対する思いは
日本武道館で演奏するのは初めてなんですけど、大学の入学式が日本武道館だったんですよ(笑)。まさか自分がここに立つことになると思わなかったの、最初はビックリしましたけど、伝説になるようなコンサートがたくさん行われてきた場所なので、そういう場所に恥じない演奏が出来たらいいですね。

● ブルーノート東京で行った『デュエット』と比べて、今回の日本武道館コンサートはまた違ったものになるのでしょうか
常に新たなものが生まれる音楽なので、ブルーノートでやった時も毎日違いました、今回も絶対違うものになるし、ともかく、その時に自分が見持しているものを全てを出せるように、それ以上に、自分さえ知らない自分を見つけれたらいいと思っています。

● 5月28日リリースの新作『ビヨンド・スタンダード』は、初となるスタンダード集ですが、今回スタンダード集にした経緯は
SONICBLOOMというバンドでツアーをする中で、いつかはスタンダードをやりたいという気持ちはずっとあって、企画を考え出したのが前作『Time Control』を録音している時でした。ひとことにスタンダードというのは企画だったり、日本語訳すると形とか基準という意味なんですけど、そういったものから外れているアクの強いメンバーなので、スタンダードっていうものとSONICBLOOMというバンドを合わせるっていうことが面白い、このバンドだからスタンダードやりたいと思ったんです。

● 冒頭の「イントロ」の部分の懐かしい響きは、オスカー・ピーターソンのものかとも思いましたが、上原さん自身のピアノですか
あれは私の演奏で、スタジオにあった備え付けの凄く古い調律されていないピアノがあったので、あのパートだけそのピアノで弾いて、昔の年代物のモノラルマイクで録って被せました。

● クラシック・ナンバー、ドビュッシーの「月の光」を取り上げていますが、上原さんの中でクラシックとジャズを演奏する時に、明確な区別や意識の違いなどはあるのですか
特にジャズだからとかクラシックだからという風に考えることはないんですけど、クラシックの場合、曲自体が長いですし、扱え

る素材が多いので、曲を編曲していく中でどの部分をどういう風に当てはめていこうかと考える量が、いわゆるジャズ・スタンダードといわれているものよりは多いですね。

● ジェフ・ベックの名盤『ワイアード』の一曲目「レッド・ブーツ」を取り上げていますが、この曲は思い入れのある曲なのですか
私が好きなジェフ・ベックのアルバムの中で一番衝撃的だった曲なので、それをこのバンドでやったら面白いなあと考えて。

● ジェフ・ベック以外に好きなギタリストは誰ですか
フランク・ザッパ、ロバート・フリップ、ジミヘンとかですね。

● ギタリストのアイデアをピアノに置き換えることはありますか
ギタリストの場合は、何でも分からないんですけど、その奏法だったりアイデアを取り入れるというよりは、スピリットをもらってますよ。ギタリストの弾き切る感じのスピリットが凄いい好きなので、そういう熱みみたいなものが一番感化される場所ですね。

● デビュー・アルバム『アナザー・マインド』のオープニングを飾ったオリジナルの「XYZ」をセルフ・カバーしていますね
今回スタンダードをやる時に、自分のコンサートでこの曲を演奏すると、最初の一小節くらいで「パッパ」って拍手が来たりとか、「待ってました！」感っていうのを感じるんですね。それで、昔からコンサートを見に行っていて、「酒とバラの日々」とか「枯葉」が流れたりすると、最初のメロディを弾いた瞬間にお客さんから拍手が沸き起こるっていうことがあって、「あっ、これがスタンダードっていうことなんだなあ」というのを小さい頃から感じていたの、やっぱり自分の音楽を聴いて下さっているファンの方の中で、この曲が私のスタンダードなのであれば、このアルバムにまた4人で違う形でアレンジし直してやるっていうのが面白いかなあと考えて取り上げました。

● ラストの「アイ・ガット・リズム」は、上原さんのピアノの魅力がギッシリ詰まっている曲だと思うのですが
このレコーディングをしたのが、オスカー・ピーターソンが亡くなって2週間後くらいだったんですね。だから、ちゃんと追悼という意味も含めてトリビュートを弾きたいなあと考えて、それで21歳くらいの時に彼の自宅に行った時に弾いたのがこの曲だったんですよ。彼のピアノで弾かせて頂いて、架け橋になった凄く大切な曲なので、これを選びました。

●メンバーのトニー・グレイというベーシストについて

彼は音そのものというか、音質がとってもダークで、一粒一粒で誰か分かるくらい個性を出す人だと思っんですよね。弾くメロディラインとかも凄く温かいので、そのダークさと温かさの融合っていうのが彼のベースの一番の魅力で、凄く歌心があるベーシストです。ベースってグルヴ・メイカーでもあるし、低音楽器っていう意味でのベースの役割は果たしているけれども、それ以上にメロディ楽器なんだということを彼が教えてくれるので、私のバンドの中でもそういったトニーの個性だったり良さっていうものを存分に引き出していきたいっていう思いは常にありますね。

●上原さんが好きなジャズ・ベーシストについて聞かせて下さい

オスカー・ピーターソンのトリオを通じて何度も聴いたレイ・ブラウンとかニールズ・ペデルセンとかは勿論ですけど、初めてスタンリー・クラークを見た時は凄く衝撃的でしたよね。凄く迫力だったし、ベースが小さいと思いました(笑)。あとはスコット・コリーは好きです。彼も何度かライブで見て素晴らしいなあ。あとルーベン・ロジャースも大好きですね。人柄って凄く音楽にそのまま出るようになって、彼の何ていうんだろう、温かみっていうのが凄く音に出ているし、いろんなバンドの中で起こることにに対して凄く反応が早いですね。ルーベンが多分ニューヨークで一番いろんな人とやっているとっと思うんですけど、さすがにいろんな人とやっているだけあって、即興音楽の真髄を感じますね。

●スケジュールを拝見すると本当に世界中を回っていて忙しいという印象を受けますが、今の活動状況をどう感じていますか

そうですね、まあ忙しいですけど、好きなことやらせて頂いているんで文句は言えないというか(笑)、コンサートっていう一日の数時間っていうのがもの凄く輝いている時間で、至福の時間なので、それを得るためにはしょうがないですよね。楽しんでるっていう時間は絶対にやって来ないと思うので(笑)。

●2005年1月に上原さんのニューヨークでのブルーノート公演にポール・マッカートニーが見に来たと聞いていますが、直接ポールと話す機会などはあったのですか

私、彼がいることに全然気が付かなくて…(笑)、ベースのトニーがイギリス人なので、様子がずっとおかしかったんですよ。私はCDを売ったりとか、ご挨拶とかがあって、それで、ポールからスタッフづてにメッセージが残っていて、それで初めて知ったんです。『素敵な夜をありがとう。素晴らしい！』っていうメッセージがポール・マッカートニーから来ているよ！』って言われて、「えっ！」みたいな感じでした(笑)。

●上原さんにとって特別な存在だったオスカー・ピーターソンが

昨年の12月に亡くなりましたが、今現在の彼に対する思いはまだ全く実感がありません。常に長く会っていた人で、自分の中で本当に憧れの人、伝説の人だったので、本当に実感がなくて、ちょうど今週の月曜日(4月21日)にカナダ大使館でオスカーのトリビュート・コンサートをやったんですね。小曽根真さんと一緒に出演して、私も3曲弾いたんですけど、オスカーの奥さんから「トリビュート・コンサートをしてくれてありがとう！」っ

ていう手紙を見た時に涙が止まらなくて、MCもボロボロでした(笑)。あと、5月25日にスイスのベルンで、オスカーのトリビュート・コンサートをやりますんですよ。そこではオリバー・ネルソンとジェラルド・クレイトンと私の3人でやるんですけど、それはカナダ大使館の時と違って一般公開されるんですけど、その時にオスカーの最後のリズム・セクションだったデイヴ・ヤングとアルヴィン・クインともやるんです。そういったイベントを重ねてくると、ああ本当に亡くなったんだ、本当にいないんだなあって実感してきますね。ひとつひとつ大切に、感謝の気持ちを込めてやりますけど、プログラムを考えているだけで泣けて来ますよ…。

●上原さんはインタビューで、「私は自分の音楽に名前を付けたくない…」と語っていますが、上原さん自身から見て、現在のジャズ・シーンを感じると思いますか

世界的には場所によって全然違うんですけど、日本は盛り上がって来ていると思いますよね。いろんなフェスティバルとかも増えて来ているし、ジャズのリスナーだけが聴くものだったのが、最近はおもっというんな人が聴けるようになってますからね。こちらから相手の方に呼びかけて行く姿勢っていうのが必要だと思うし、宮崎駿さんのことばで凄く好きなことばがあるんですけど、『門戸はどれだけ狭くてもいいけど、敷居は高くしちゃいけない』っていうことばがあって、「敷居が高い人は飛び越える」という作業が凄く苦手だけど、人は覗くっていうにはみんな好きなんだ」とっ思うんですよ。だから、どれだけ狭くして自分の好きなこと、突き詰めたことをやってもいいけど、必ず敷居は低くしておくというのが、ジブリの作品を見て感じますね。はっきり言ってオタクみたくに凄く細いことやっているのに、分かりやすく子供から大人まで楽しめるというのには、そういった姿勢が宮崎駿さんにあるからで、尊敬しています。ミュージシャン側がそういう姿勢でいけば、聴いて頂けるのかなと思いますよね。

●ソロ作品やビッグバンド、ヴォーカル作品など、将来やってみたいと思っていることはありますか

ビッグバンドやオーケストラとか大編成のものはいつかやりたいですね。でも、自分が歌を歌いたいということはないです(笑)。私、曲を書く時に「フンフン」って歌うので、自分で分かるんですよ(笑)。音をきちんととるっていうのは難しいです！(笑)。何となくは歌えるけど、私は突き詰める性格なので、ピアノでもまだ全然自分の演奏に満足出来ていないので、自分で歌なってやったら歌ったの聴いて卒倒しちゃうと思うので(笑)。でも、歌の人と一緒にやりたいという気持ちはありますね。不可能でない限り可能性は常に追って行きたいなあ(笑)。

●最後に『The Walker's』読者にメッセージをお願いします！

また今年もこの新作『ビヨンド・スタンダード』を引っ提げたライブをやると思うので、私たちの音楽っていうのは、弾く時弾く時で全く違ってくるっていう面白さがあるので、そこでまた曲の一部になりたくて来て頂けたら嬉しいですよ！

【上原ひろみ Official Web Site】
<http://www.hiromiuehara.com>

上原ひろみの最新作&初のスタンダード集！



ビヨンド・スタンダード

上原ひろみ ~ HIROMI'S SONICBLOOM

ユニバーサル/UCCT-9007 <初回限定盤>

¥2,800 (tax in) / UCCT-1197 <通常盤>

¥2,500 (tax in) 2008.5.28 In Stores!

* P11にレビュー掲載

* P20に4.30 日本武道館コンサートのライブ・レポート掲載

上原ひろみサイン入りCD (1名) プレゼント！



「送付先住所」「氏名」「電話番号」を記載の上、下記アンケートに答えて、件名に「上原ひろみサイン入りCDプレゼント係」と明記の上、E-mail : thewalker@k07.itscom.net宛にてお送り下さい。

【アンケート】①性別 ②年齢 ③職業 ④本誌をGETした場所 ⑤当インタビュー記事の感想 ⑥本誌の感想
【当選は発送にて代えさせていただきます】

デュエット/チック・コリア & 上原ひろみ (UCCO-1034)